

# 説教讃語座とは？

## 文樂座との大激戦

筑後掾が師弟の關係を温め、かつは互ひに技藝練磨の機會にしようとした二十日會が、後年の因講の起源をなしてゐるが、その因講が寛政の創立以後、時代の推移とは云ひながら、次第にその本旨を離れて形式的に、云はゞ何々商組合と云つたやうな事務的機關に移つて、藝術の本旨から遠ざかつて行つてゐることは次の文政九年の他國儀定記なるものを見るとよくわかる。

### 因講他國儀定記

今般因講古老中老世話方立會の上申合せ相極め候文面左の通り

夫當因講へ入講致候義以前より地他共入講料同様に致來り候處近頃一向不極りにて掛錢等一年増に不參數多有之候に付國々に年行司を相立置掛錢不參無之様國々最寄々々の年行司より嚴重に申渡し無遲滯登販可有之跡等閑に打捨置催促も不致はわれ々是ををつらつらおもん謀るに國々年行司衆中に威勢無之と其役向を笠に著て不入事に力身を附候儘新人の人々を始尊敬薄く舌を出し横目にて袖を引合ひ後ろ指さし候形にも被存左様候得共儕らが不徳斗りに不有往古より守り來る因講開祖え對し其不孝須彌山より頗る高し故に此度諸事嚴重に相改め當地其師匠々々より篤と相糺し掛錢取立可申處海陸を隔て候へば何事も心に不任に依て再談の立會にて相極候は自分生界掛切料百疋と相定め候得共不得止事他國講中至て猥りに相成候故以後廉略無是様因講を重んじ以前の入講に不構此度相改め他國者殘らず掛切に可被致候勿論其以前地他同様の節入講被致候方々相渡候講札尙又永代掛切の講札は其師匠々々より金百疋と引替に御取替被成候（中略）

去る未歲極月大會にて致披露候通り他國太夫衆中並に三味線衆中新入の人々は講料金百疋は永代を掛切にて外に出錢壹錢も無是候段篤と御承知可有之候 以上

文政九歲戊年五月改

千秋萬歲樂壽大入叶

各地に散在する師弟關係の状睹るが如く、講の幹部達はとう／＼月々の掛金が集まらないので、生涯掛切の制度に改めてゐるなど滑稽である。その後また次のやうな定め書を出してゐる、これを見るとき／＼冠婚葬祭の取扱ひ程度がやう／＼因講の仕事であることがわかる。

## 定

此度申年相改諸事目出度祝儀事並に不祝儀萬事何に不寄古老中老衆中より青銅二貫匁づ、中老行司より集め進上可致事且又他國出勤の太夫三味線の衆中は其儘に差置歸宅の砌其割前出精可致候事右何れも師匠方に其例有之候得ば門弟衆中より中老行司を申可出候百數十年來儼然として存續し、何等外部の物の侵すことのない、威容堂々たる義大夫節の世界、連綿として續く藝術の殿堂。そこへ向つて突然にも、異様奇怪なる説教讚語座なる一派が現はれてまるで神の託宣かなんぞのやうに、高壓的にかういふことを云つて來た『汝等淨瑠璃を業とする者は皆わが讚語座の配下である、今日以下わが隷屬に従へばよし、さもなければ今日限り斷じて淨瑠璃を語り三味線を弾くことを許さない、なほこれに附屬して業に従ふものも同斷である』。

これが現今ならば、フ、ン詐欺師だな。とすぐに氣がつく處だらうが、その頃の當業者には已れの従ふ業務が、どういふ歴史をもつて成り立つて來てゐるものか、たゞ淨瑠璃道泰平の夢に馴れて、かういふものを唸つてゐるといふ程度の人々が多かつたのだから、その驚き方はとても大變なものであつた。而かもその説教者一派は、當業者達が平生音曲道の祖神として渴仰してゐる蟬丸神社の口宣を受けた由緒をふり廻はして威嚇した上に、恰ど愚昧な當業者を欺くのころ合ひの古い系統を述べ立てたのである。

『おまへ達の日頃業としてゐる淨瑠璃は、音曲の祖神蟬丸の琵琶の流れを汲み、或は説教節をさり入れて作り上げたものだから、即ち説教節の一部である。説教節はすでに正徳年間から蟬丸宮の口宣を受けてゐるが、おまへ達の淨瑠璃は神の口宣を受けたこゝがあるが、その口宣を受けてゐない以上は當然わが提唱するこゝの讚語座の配下に入るべきである』

かういふコケ嚇しをやつたのだが、全く嘘ではなく、事實その通り、たゞ説教節をとり入れたから淨瑠璃がその配下に従はねばならぬといふ點だけが馬鹿々々しいだけである。けれども一般を脅やかすにはこれで充分である。それならば、いつそ讚語座に従へば何ういふ結果になるのかといふと、いづれは蟬丸さんの御養錢とか組合の經費だとか云つて、當業者から金錢を絞り取らうとするぐらゐのものだが、何んにも知らない當業者の一部は、已れ達の踏むでゐる大地がぐら／＼と揺れ出したやうに感じたのである。こゝで説教者

一派の云つてゐる由緒書なるものをちよつと記して見る。

説教者 由緒

關清水大明神蟬丸宮

別當

近松寺

山城國愛宕郡日暮小太夫名跡

唯重

右以唯重依願繼目所補太夫號仍而如件

正徳二壬辰九月二十八日

正満講師

淨密講師

淨榮講師

説教者 日暮小太夫唯重

なか／＼巧いところへ目をつけたもので、首尾よく行けば大したものだがなか／＼さううまくは行かない。それは淨瑠璃界の中心勢力であるところの文樂座の一派がなか／＼頑強に固執してこの勸説に應じないから、讚語座の方も躍起となつた。そこでこの双方の折衝がやがて外部的の争ひとなつて現はれ、讚語座は文樂以外の太夫達で、うま／＼と抱き込まれた連中を一座に組織し、文樂座に對して宣戰を布告した。實に天保八年十月十七日のことである。讚語座は文樂座のすぐ傍の同じ稻荷社内の北の芝居へ『説教讚語座』なる挑戦の看板を揚げ、一舉にして敵陣を屠るべく堂々と興行をして文樂座の面々を威嚇した。

讚語座の陣容。

(太夫)三光齊、組、筆、鐘。(三味線)彌七、燕三。(人形)兵信、千四、文三等

これに對する文樂座は。

(太夫)長門、住、重、勢見。(三味線)仙左衛門、勝右衛門、宗六。(人形)金四、辰造、辰五郎。

双方火花を散らして戦つた。もつともかうして戦つてゐるうちに、人形遣ひや出方の中には、飯の種を乾し上げられてはといふので、そろ／＼軟化しかけるものも出来てゐたが、座主を始め太夫連は頑強に抵抗したから讚語座の方もどうすることも出来ない、その一方この事件は西町奉行所へ訴へられてあつたので、讚語座は十月と十二月の兩度の興行。文樂座は十月は興行を見合はし十一月と十二月の興行をやつた。その十二月の初旬のところに町奉行所の裁決があつて、とう／＼讚語座の敗北となつてしまつた。無論これは當然の處置であるが、文樂側幹部連の善戦よく効を奏したといふことは疑ひを容れない。

かうして妖魔に等しい讚語座は影をひそめ、義太夫節の正統は全く文樂座によつて完全に擁護され幸ひに事無きを得て、その爲めに文樂座の權威がどれほど高められたか知れなかつた。義太夫節を固執して動かざるその堂々たる態度の立派さは世間の信用を強める上に十二分のものがあつて、當時人氣のあつた北堀江市の側の芝居御靈社内の芝居と對立して文樂座斬然一頭角を現はして來た。従つて座摩神社内、堀江荒木、北新地、道頓堀の竹田、若太夫、角座、などの芝居は、とてももう文樂とは肩を並べられない程になつてしまつた。

南海天王寺線の曳船停留場の附近、市場の裏、人家稠密、塵芥堆積の片隅に、見る影もなき哀れな姿の、近松門左衛門碑といふのがある。一見した人は誰れしも不思議に思ふ。云ふまでもなく喰はせ物である。明治二十九年の頃、近松門左衛門の末孫で同じ近松門左衛門(四十二歳)と名乗る男や、近松の本家筋、長門國深川村の相森親介(六十三歳)が、兵庫縣久々知廣濟寺(近松墳墓のある寺)住職太田慧樹、三人が協同して、門左衛門の記念碑を建設するといふので、趣意書、設計書、寄附勸誘書を因講に出した。さうして天王寺塚原の丘に前記の碑を建てた。それまでは無事で、珍らしさに立寄る人もあり、なほ附近に三味線に關係ある藝人や藝妓などの縁故をつける爲めに猫塚といふものまで建て、相當賑はつたのだが、近松作品の版權事務所を設けて、作品の上演毎に版權料を收めさせいふ一段になつて失敗に終つた。此人々の想定では淨瑠璃といふものが多く近松の作だと思つてゐたのだが、豈圖らんや多くの上演狂言には殆んど近松作が無かつたから、折角の企劃も水泡に歸した。(尤も近松であつたところで成立はしないが)。さうして記念碑だけが迷惑そうに殘骸を晒すことになり、それも三十六年の第五回博覽會の時に前記の片隅へ押し込められたのである。而かも前記の近松の末孫といふのは、その當時東京府下の何處やらのお役場で改名届を出した變てきな人物だといふことが、あまになつて解つてしまつた。

こんな風に近松を材料にした記念碑建設さか何んさか可なり各地に企てられたやうで、二十四年の頃にも、やはり近松翁の末孫といふ、山口縣周防國山口町の松村寅吉といふ人が、近松の墳墓の地山口町の妙泉寺に銅像を建て、近松院を設け文藝會を起すといふ計劃で近松の系圖といふのを持參して上阪して來たが、この系圖に近松の死亡年が正徳二年とあつたので、なんの役にも立たぬものになつてしまつた。近松の歿年は享保九年であつて正徳二年では、近松は未だ六十歳だ。

その後は明治三十二年にも、近松翁記念碑建立の寄附勸誘書が、肥前國唐津近松寺邊りから、大阪の因講に舞ひ込んだ事がある